

令和2年度 【伊丹市】認知症地域支援推進員活動報告

1 認知症地域支援推進員：1名(専任)

2 認知症地域支援推進員の役割

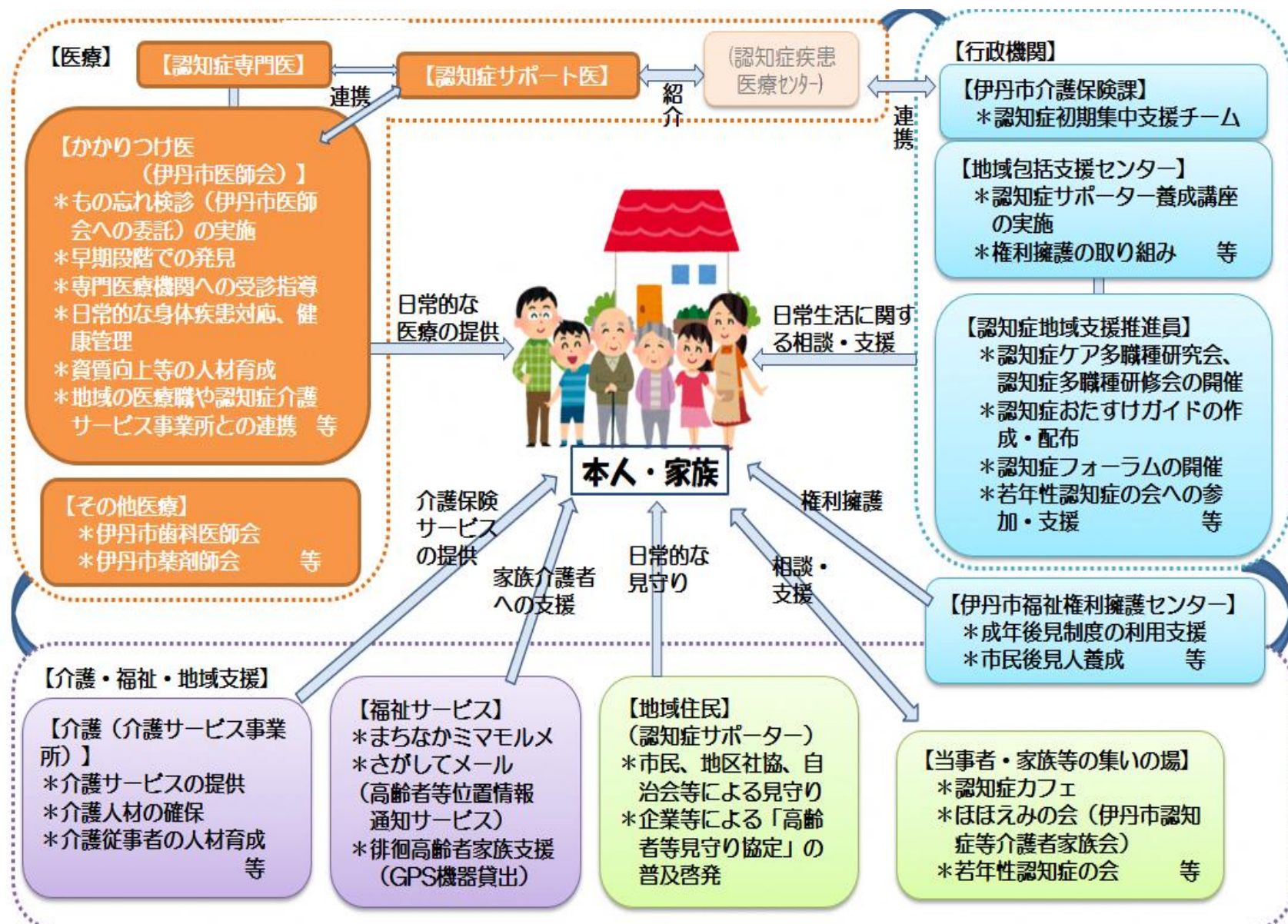
- 地域への普及・啓発事業（認知症フォーラム等）の企画、実施
- 企業、団体、学校、見守り協定協力事業所等への認知症サポーター養成講座の実施
- 認知症キャラバンメイト、認知症サポーターの地域での活動創出及びフォローアップ
- 認知症カフェ等、認知症の人やその家族、地域住民、専門職等、誰もが気軽に集える場の立ち上げ、活動継続等への支援（地域で認知症の人を支えるための活動）
- 認知症ケア多職種協働研修を通じた、専門職の認知症対応力向上の推進
- 認知症ケア多職種研究会の開催
- 当事者会、家族会、ボランティアグループとの連携、活動の支援
- 認知症の人に対する相談対応、必要な情報提供、関係機関へのバックアップ

報告者氏名：●伊丹市地域包括支援センター

認知症地域支援推進員 田中 友紀

●伊丹市 介護保険課 阿部 育恵

【伊丹市】認知症施策全体図



【市町名】 R2年度認知症地域支援推進員具体的活動報告

テーマ番号< ⑤ > 標題「若年性認知症の人と家族への個別支援」

○ご本人とご家族

ご本人は60代前半の男性。アルツハイマー型認知症の診断あり。妻と成人した子供3人の家庭。

○支援のきっかけ

医療機関より相談が入る。「認知症の診断で来院された男性がいる。若年性認知症に関する社会資源について情報が欲しい」。

○本人の状況・意向

平日は仕事をしている(再雇用)。認知症状を考慮してもらい、今までと違う仕事(事務)をしているが、慣れないパソコン作業で、失敗しないようにと常に**緊張の毎日**を送っている。本人の気持ちとしては「仕事は辛いですが、65歳の定年までは勤めたい」、「何か楽しみが欲しい」。

○他機関との連携・支援のはじまり

若年性認知症支援センターの相談員に助言をいただき、本人・家族・依頼のあった医療機関の相談員と共に、今後の生活について話し合いを行う。

活動内容

ニーズの汲み取り

本人にとっての「楽しみ」の部分で支援を考える。本人の話や人柄から、大人数の集いは好まないが、黙々と作業することは好きなことが分かる。

農家のお手伝い

地域で農家をされている方のご厚意で、農園の作業をお手伝いさせていただくことになる。作業のお礼として収穫した野菜を少しもらえることも本人にとって励みになった(労働に対する対価があることは、社会の一員としての役割意識や生き甲斐になるのかもしれない)

収穫した獅子唐。持って帰って妻に調理してもらおう→



本人にとって難しいこと&支援者のサポート

力仕事得意なため**農作業自体は問題なく出来る**が、駅から農園までの**道中で迷ってしまう**(会社への道順は長年通って慣れているので電車で通勤できているが)。若年性認知症支援センター相談員と曜日を分担し、農園の行き帰り+農作業に同行する。道すがら、本人のやりたいことや心配事など話を聞く。



若年性認知症の人に必要なサービス・課題

障害福祉サービスの移動支援を利用する

道中の付き添いのため、障がい福祉サービスのガイドヘルプの利用が可能か、市障害福祉課の相談員に相談する。“電車で1人で通勤できる”“65歳になると介護保険サービス優先”ということで、利用が許可されるか不安であったが、障害手帳とサービス申請を行った。

課題と感じたこと

本人は目的地に到着すれば活動自体は問題なく取り組んでいるが、行くまでに道に迷ってしまう。

“道中の付き添い”といった部分的なサポートがあれば認知症であっても今までどおり社会参加することができるが、介護保険サービスには移動支援が無く、障害福祉サービスであっても65歳を過ぎると基本的には介護保険の適用を勧められる。

65歳を過ぎても、まだ現役並みに生活できる人が多く、使える資源がないことで外出等に制限がかかってしまうことが課題である。



今後の活動・生活について

申請が通り、現在はガイドヘルパーが道中と農作業に同行している。退職後も農園に行きたいと本人は希望し、農園側も受け入れてくれている。現在は65歳になり、退職も近づいている。社会参加する機会が減ると、認知症の進行に繋がる可能性もあり、本人自身も「何かやることが欲しい」と話している。本人に合った他の楽しみを見つけるお手伝いを続ける。

最後に・・・（今後の取組みに対する認知症地域支援推進員としての思い）

若年性認知症の人は、就労の有無、子供が独立しているか等、立場によって本人の責任・負担の度合いや支援者のサポート内容がかなり変わってくる。まだまだ現役並みの生活力がある人にとっては、介護保険サービスのような既存のサービスが合わないことも多い。新たな資源の開発という大変に感じるが「この部分にだけ」サポートが入ればこれまで通りの生活が出来る、という視点を持って、ニーズを丁寧に聞くことを大事にしたい。進行性の病気なので、いずれは生活環境を変化させざる得ない時も来ると思うが、本人のためにも急激な変化ではなく、ゆるやかに移行していくことを意識して支援にあたりたいと思う。

